

# 「山づと」の思い出



## 松山義則

### 国語の先生

同志社の校庭は、一面クローバーがおおひ、鬱蒼と大樹がその枝をのびしていた。緑のふかい色にうずまって寝ころぶと、つめたい土の感触と、水々しい草のかおりをかぐことができた。赤煉瓦の建物が木々の間にみえる。終戦前後までの同志社を知る人々には、共通の思い出であろう。

終戦数年の間に、教育人口の急激な膨脹にともなって、新しい校舎が林立し、緑地はとりはらわれ、これにかわって、明るいアスフ

ルトの通りが校庭の中央を横切って走り、明朗なキャンパスに一新した。

戦前、烏丸の門に「同志社中学」と墨書した門標がかけられていた。私立学校として、中学校と名のらないという事実が、少年の心に、反骨的な気風を成長させ、同時に、意欲的な生き方を発動させるなものがあったのかもしれない。私が中学三年生のとき、京大を卒業されたばかりの、尾田卓次先生が国語の先生として就任された。長身紅顔の若々しい、まだ学生さのぬけきらぬ青年教師であった。なんとなくきこちなく、固がるしい

雰囲気であったが、しかし、先生をむかえる  
と教室は峻切の気を感じ、力のこもった授業  
の時間であった。

幸い、私たちのクラスは先生が司級(担任)  
になられた。チャペル礼拝のほかに、週に一  
度、クラス礼拝があつて、そのあと、司級の  
先生の採量で、しばらくの間、自由に話しあ  
う時間がもたれた。先生は、その時間に、い  
くつかの名著を紹介され、クリトン、ソクラ  
テスの弁明、代表的日本人、学生に与うる  
書、あるいは高瀬舟と、日を追うて中学生  
の書棚を文庫版がかざるようになったが、理  
解するにはかなり困難なものであつた。

### 山づと

あるとき、山づとと名づける小文をガ  
リ版印刷にされて、生徒にくばられたことが  
あつた。助言二つ三つと副題して、「はじめ  
に、この文章は、この夏、一週間ばかり高原  
で暮したそのつれづれに書いた。その頃はま  
だ、多分諸君とも御別れだと思つていたの  
で、記念として贈らうと云ふやうな気持もあ  
つたのである。こころみに『山づと』と題す  
る所以である。今ここに級礼拝の料にもと、

印刷に附して諸君に頒たうと思ふ。」(原文のまま)と序せられている。国語の先生らしくプリント屋がまちがえたと思える誤字や送りながに對して、別に一枚詳細な「山づと」正確表がついている。はしがきに「……このまづい文章を君たちの前に出さうと思ふそこには、僕としては真面目な気持がある。どうかその真面目な気持からする熱意は汲んでほしい。僕は心を傾けて諸君のために語らうと思ふ。もとをいへば僕にそういふ熱意をわきたせてくれたのは君たち自身なのだ。」と先生は語りかける。気まじめな文章のはこびのなかに、先生のお人柄がそのままのべるようである。山づとの内容は、はしがきについて、上級学校入学試験、教養、基督教、性、級の団結についてのべられる。今から考えてみても、中学生にとって、もともと身近な、大切な問題であり、それを端的にとりあげられた先生の心が、中学生にどれほど強く接近しておられたかがわかるであらう。

教養についてのすすめのみなで、先生は、「教養や読書といふことに就いては實際上或程度の時間、ひまが必要である。ところが諸君の生活は運動や勉強で相当に忙しい。先に

言った受験勉強でもはじめるとなるとなはさからひまがなくなるであらう。もちろん、ひまがないといふことを口実にしてゐたらどんなことでも出来るわけではないが、それにしてもそういうふ点で行き過ぎた奨励することは考へ物であるし、又むだなことである。その上どちらかと云へば諸君はそういう教養時代にはまだ少し早いのである。むしろ今はそういう教養の基礎になるころの常識を養ふことが中学生の本旨だといつてよい。けれども近頃の中学生を見てゐると、常識ばかり発達して教養などにはまるで無関心なものが多い。諸君が教養の大切なことをよく理解して、少しでもそれを深めようといふ心がけを失はないやうにしたらへばそれでよいのである。一篇の映画を見ても美しい感激を味ふことも出来るし、一つの新聞記事を読んでも正義の大切さを感じる事が出来る。同志社のやうなところこそ公立とちがつてさういふ教養に憧れる雰囲気をもってほしいと思ふ。同志社の特色或は同志社らしさといふものは、こんなところに求めるべきだと思ふ。たゞの和かさといふやうなものばかりなら、それは特色としているほどのものでもない。」

## 共同の目標

先生の言葉のなかには、何か情熱にあふれた静謐さをおぼえる。これは、基督教、性についてのすすめのみなにも共通してみられるところである。私が中学を卒業して、大学予科に進学してからのことであつたが、太平洋戦争が勃発して間もなく、先生に会う機会があつた。そのとき先生は、「戦争に突入したからといつて、何もあわてて街を走ったり、緊張を表情にあらわして、大声でさげんでみてもどういふことがあろう」といった意のことを話された。私は、ふりかえつて、内心全くはじ入るところがあつた。実は、朝、ラジオにその報道を聞いて、自分の心をおさえることができず、登校の道も悠然と歩くことができず、小走りに校門をくぐりぬけていたからである。

先生は、正に情熱のかたまりのような方であつたけれども、直情徑行することは許されなかつた。感情のおもむくままに、安易に行動に走ることを強くいましめ、常に、情熱を心にこめて考えぬくことを教えられた。心の安定を得るには、まだ年はのいたらぬ中学生

にとつてはかなり苦しいことであつた。

級の団結について、人間の社会的な共同生活についてふれられ、また生徒たちのクラス的一致団結について、こまかな、ゆきとどいた勵しをされた。「最後にしかし、最も大切なことがある。それは諸君が一つの共同の目標をもつといふことである。それが君たちの行の土台になり、めいめいの心がまえがその一つの共同のものに向つてゐることによつて、お互の心が常につながることが必要だと思ふ。それではさういふ共同の目標はどこに求めたらよいのか、諸君にとつてはそれはただ、同志社中学生としての誇の外にはないであらう。誇りなどといふと、何か小さなことに高ぶるやうなことが聯想されるけれども、もちろん僕はそんなつまらないものを言ふのではない。我が同志社は新高先生の理想によつて立てられた。ただしかしその精神はもし君たちが之を受けつぎ、之をさかんにしなければ、やがては消えてしまふのである。先生の精神に就いて説教をする人はいくらもあるだらう。しかしそれを説教したり、又聞いたりしたところでそれだけでは何にもならない。君たちがそれを盛んにしなければならぬ。

それを日々の君たちの仕事にあらはしてゆかねばならない。ここにこそ諸君の務めと誇があるだらう。」

### 素直に、真面目に、快活に

先生は広い意味でのヒューマニズムの上に立つた人であつた。かなり強力な精神主義を土台にもつておられたと思う。先生は、いわゆる同志社人ではなく、また基督者でもなかつた。一人の国語教師であり、結果的には、大学を出てから、つかの間の腰かけ的な時間を中学にすごされたことになつた。しかし、先生は、数年の短い同志社奉職中に、誰にもましてよき同志社の理解者であり、基督教に對して正しい判断と心情をもつと努力された。生徒たちとの人間的なつながりに精魂をかたむけられたのである。同志社在任中こそ先生の全生涯が燃焼した時期であつたのである。

先生は「素直に、真面目に、快活に、何をするにも、この三つの気持を失わないように。年がゆくにつれてかうした点は薄くなり易いのだから。もとよりこの三つだけあればもうよいといふのではない。素直なというこ

とはよいが、ただそれだけで他人にばかり頼り、自分のことを反省したり、自分のやらうといふことを努力してやるといふ気持がなかつたらどうであらう。又いくら真面目であつても、ものよしあしを正しく判断する力が欠けていたら本当に立派なことは行へないだらう。明朗だ、快活だといつても、落付きもなく、かるはずみながら元気だけであるのではし方がない。」

戦争は酷になり、われわれは同志社をたつて、四散した。戦後、間もなく復員して研究室に入り、早速、私は先生の安否を問うたが、すでに山陰の旧制高等学校教授として赴任されたことを先生の葉書で知つた。しかし、旬日を経ずして、その地に病をえ、急逝の報をつづいて受けたのである。年三十をかぞえずして、短命の生涯を終わられたのである。

先生が學者として、あるいは将来を屬望された若い研究者として、どのような評価をうけておられたかは、中学生の私には知る由もなかつた。何度となく重ねてお宅を訪問し、完全な無時間的感覚で長居する中学生を相手につきない話をされた。研究者にとつて、もつとも大切な時間、短命におわられた先生に

とつては、それこそ貴重な一日一刻であったのに、研究を置いて、われわれの感覚の地盤にまでおろして下さったのである。お宅に訪ねると、瘦身を和服につつんで、几帳面に整理された和書の山にかこまれ、先生は大きな黒塗の机の前に端座されていた。

### 短命の生涯

私は、中学、大学予科、大学そして研究室の生活を通じて、尾田先生のみならず、同社社のなかで、数多くの恩師をあたえられ、めぐりあうことができた。その学恩の故に今日の仕事を僅かながらすめることができた。同志社九十年の歴史は、何百何千の教師を教壇に立たせた。青年教師、尾田貞次先生も、その無数の教師のなかの一人である。去りゆく時の流れのなかで、一人一人の教師は忘れられ、消え去っていつても、同志社は、新島襄の名において永遠である。しかし、ひるがえって、一人一人の教師は、新島襄の精神を体して現実と接触した生徒、学生の心と身のなかに力づくよき生きているのである。

短命の生涯の、そのすべての精魂を同志社における教育に燃焼させられた尾田先生の、

情熱をこめた静溢さをここに特記したい。その影響を受けた少年達の数は全同志社の学生数にくらべてごく僅少であったとしても。

同志社の現在、大いに発展し拡大された。校庭は明るくなり、大きく躍動をみせている。しかし同時に、静かさは失われ、喧嘩と動きにみちている。同志社には長く、生きた体験に基礎づけられた社会的自覚と、その実践が伝統として脈々と流れ、自己をすてて人々のなかに生きた無数の偉大なる人物を輩出した。しかしもし、われわれの情熱があまりにはげしく行動をかりたて、いわゆる日本の反主知主義的伝統に組する結果を、意図に反して生じるとしたら、これは大学としての同志社の自己破壊となるであろう。たとえ、冷酷で、堂々めぐりの無用、虚色とみえても、静かなる学問的探求は、情熱にあふれた決断と、生きた実践の正しい基盤となるであろう。あえて、教育と研究の場の大学が、情熱を探くひめて、たくましい自由をもつて、徹頭徹尾、静かに考えぬく共同の場所でありたい。同志社が、情熱をこめた静溢さを、そこに充満させることを願ってやまない。

(文学部教授・実験心理学)

## 丹後の宮津・天橋立

政府登録国際観光旅館  
日本交通公社協定  
日本旅行会協定

### 天然温泉



TEL 宮津 (代) 3276~8

## 芦原温泉

福井県



政府登録国際観光旅館